

書評

岡田暁生『西洋音楽史』

——「クラシック」の黄昏

(中公新書、平成十七年) 七八〇円

古田島洋介*

研究者と呼ばれる方でも、自身の専門領域や近接領域から遠く離れた分野となれば、たいていは高校で習ひ覚えた知識が頂点、下手をすれば中学校、いや小学校のときに仕入れた知識だけで一生を過ごす分野さへあるだらう。大半の方々ととつて、音楽史はそのやうな分野の典型ではなからうか。もちろん、ベートーヴェン好きとなれば、弦楽四重奏の滅多に演奏されない作品にまで鑑賞の幅を広げてゆくかもしれない。ショパン好きであれば、バラードについてだけは、さまざまなピアニストの演奏をこまめに収集してゆくかもしれない。けれども、それはあくまでベートーヴェンの楽曲やショパンの演奏スタイルについて詳しくなつてゆくにすぎず、音楽史に関する造詣が深まることは別次元の話である。特定の作曲家や楽曲についてどれほど精通しようとも、音楽史となれば、小学校の音楽室の壁に貼られてゐた大作作曲家の肖像付き年表よろしく、

相変はらず「古典派」「ロマン派」あるいは「音楽の父バッハ」「神童モーツァルト」「楽聖ベートーヴェン」「歌曲の王シューベルト」「ピアノの詩人ショパン」くらゐの知識にとどまつてゐることが多いのではあるまいか。ましてやクラシック音楽ファンといふわけでもなければ、実際かうした知識が関の山だらう。それでは「鉄人ルー・テーズ」「神様カール・ゴツチ」「燃える闘魂アントニオ猪木」などといふプロレスラーの紹介と五十歩百歩、ほとんど選ぶところがあるまい。いつたい、バッハほどのやうな意味で「音楽の父」と言はれるのか。ベートーヴェンはなぜ「楽聖」と讃へられるのか。その歴史的な位置付けがわからなければ、小学生の域にとどまつたままだと貶されても、にはかには反論しづらいものがあらう。

岡田暁生『西洋音楽史』は、さうした小学校止まりの「音楽史」を一気に高みへと引き上げてくれる好著である。ぼんやり想ひ描いてゐる「音楽史」が、実は西洋音楽史にすぎないことを再認識させてもらへる点でも有り難い。副題「ヘクラシック」の黄昏」も読書欲をそそるだらう。これだけ盛んにクラシック音楽の演奏会が催されてゐるのに、どうして「黄昏」を迎へてゐるのか、と。

本書の執筆方針は明快だ。「この本の主役は、西洋音楽の〈歴史〉であつて、個々の作曲家や作品ではない」「可能な限り一気に読み通せる音楽史を目指し」「中世から現代に至る歴史を、〈私〉という一人称で語ることを恐れない」(まえがき ii 頁)。事実、かうした言明が読者を裏切ることはない。本文全二三〇頁を通じて常に西洋音楽の「歴史」が織り成され、各種の簡要な説明は一气呵成に読み通すことができる。諸処に開陳される筆者の私見も明確に整理されてをり、大作作曲家に対する陳腐な讃辞を意識して慎んでゐる点が好ましい。蓋し、本書は、「音楽

書評 岡田暁生『西洋音楽史』——「クラシック」の黄昏

古田島洋介 * 言語文化学科

教授 日中比較文学

史」といふ難物を、楽譜や録音資料の助けを借りず、ひたすら言語のみで綴ることに成功した稀な例である。

グレゴリオ聖歌を代表とする中世音楽が、ルネサンス期・バロック期を経て、どのやうに古典派音楽へと推移していったのか。もし冗長にして拙劣な解説でも加へられたとしたら、ただでさへ模糊たるイメージがますます混乱するだけだろう。しかし、岡田氏は然らず、その間の変遷を見事に説き明かしてくれる。疑ふ向きは、本書一三・二四・四一・五三・七四・一〇二頁に掲げられた高音部と低音部の概念図を御覧いただきたい。グレゴリオ聖歌から古典派音楽への変遷が一目瞭然のはずだ。「オルガヌムとは何ぞや」「モテットとは此の如し」などといふ講釈をいくたび聞いたとて、それが如何なる変貌を遂げて古典派音楽へと結び付いてゆくのか、なかなか理解できるものではない。何を隠さう、岡田氏の説明によつて、私もやうやく古典派音楽への脈絡がつかめたのである。

もつとも、右に記した高音部と低音部の概念図が、ロマン派以後の音楽について掲げられてゐないことには注意すべきだろう。むしろ、これは岡田氏の失念や怠慢が原因ではない。ロマン派音楽ともなれば、高音部と低音部に分けて考へるやうな単純な図式では、もはや整理が利かないのである。

ただし、事が単純に済まぬとはいへ、ロマン派音楽は、古典派音楽と並んで、我々に最も馴染みの深い音楽だ。問題はそれ以後である。ドビュッシーやラヴェルあたりまでは何となくわかつてゐるやうな気になれるだろうが、両者の位置付けはもとより、その後の音楽の特徴や変遷となると、ほとんど見当すらつかぬといふのが正直なところではあるまいか。これについても岡田氏の叙述は明快だ。世紀末から第一次世界大戦に至る時期の音楽を的確な仕分けに基づいて解説、クラシック音楽が持

つてゐた「調性」「拍子の一定性」「楽音」の三要素が破壊されたことを述べ（一九八〇～二〇〇頁）、最後に二十世紀後半に見られる三つの主要な潮流として「前衛音楽」「巨匠の名演」「ポピュラー音楽」を指摘する（二二一～二二五頁）。二十世紀の混沌たる音楽事情を、よくぞここまで簡明に整理してくれたものだ。その手腕には、まさに頭の下がる思ひである。

とはいへ、本書の楽しさは、音楽の「歴史」を説く部分にばかり見出されるわけではない。散見する岡田氏の私見も、充実した愉悦をもたらしてくれる。文字どほり「私見」の二字を銘打つ見出しは、「バッハの〈偉大さ〉についての私見」（八九～九三頁）だけだが、率直に「私にとってバッハがいろいろな点で理解するのが難しい作曲家であることを、まず告白しておかねばならない」と述べてから、バッハの「抽象性」と「神学上の背景」こそが理解のうへでの障害であると説く。そして、バッハが「一九世紀の神話」として「音楽の父」に祭り上げられたことに注意を促し、さらに「作曲家にとってのバッハ」「演奏家にとってのバッハ」について私見を開陳する。簡潔ながら、読み応へ十分の一節だ。また「ベートーヴェンと〈啓蒙の音楽〉のゆくえ」（二二〇～二三〇頁）も、ベートーヴェンの音楽を説き明かして甚だ興味深く、殊にシューベルトの交響曲《グレート》を引き合ひに出してベートーヴェンの特徴を論じた点は秀抜であらう。ただし、俗にバッハ、ベートーヴェン、ブラームスを「ドイツ三大B」と称するものの、ブラームスについては「職人」の側面を強調し、その「フォルマリズム的な音楽観」に言及するのみだ（一三三・一六六頁）。かうした取り扱ひの軽重も、岡田氏の私見の一端かと愚考する。

知的で冷静な私見が大部分を占めるなかで、いきなり感情的な色彩の

濃い私見が飛び出すのも一興だらう。それは、十九世紀におけるパリの音楽生活を活写した叙述のうち、「簡易版サロン音楽」(一五四頁)に触れた部分に見える。岡田氏は例の有名なバダジェフスカ《乙女の祈り》に鼻持ちならぬ印象を抱いてゐるらしく、「シヨパン風だが平板で過剰に感傷的な旋律、ペダルによって砂糖菓子のように増幅された情緒、安手のドレスよろしくアルペジオや装飾音で飾り立てられたパッセージ、そして〈夢見る気分〉をいやがうえにもかきたるような詩的なタイトル」と貶してゐるのである。これは「簡易版サロン音楽」一般の特徴を指摘した評言で、《乙女の祈り》だけに当てはまる話ではない。しかし、語気文勢から推して、《乙女の祈り》が嫌で堪らないといふ思ひがひしひしと伝はつてくる。もし機会あらば《乙女の祈り》のケッタクソ悪さを書きたいと思つてゐた私が、この字句を読んで快哉を叫んだのは言ふまでもない。多分に個人的な事情ながら、本書はかうした快感までも味はへるのだ。

「音楽を歴史的に聴く楽しみ」(「まえがき」vii頁)を強調し、「(歴史の教養)の喪失は人文科学の自殺行為」(「あとがき」二三四頁)と言ひ切る岡田氏が「文献ガイド」を附録としてゐるのは、十分に納得のゆく措置である。きはめて親切な内容の「文献ガイド」だ。俗物の音楽ファンとしては、せめて作曲家名の索引があれば便利なのにも思ふのだが、それでは岡田氏の趣意に反することにならう。本書に関するかぎり、好みの作曲家の部分だけ拾ひ読みすることは、岡田氏の最も忌み嫌ふ行為かと推察する。本書は通読を要求する音楽史であり、事実、通読に堪へ得る音楽史なのだ。

最後に、僭越を百も承知のうへで、注文と希望を一つづつ述べておかう。

注文とは、仮名遣ひについてである。俗に「独壇場」と書くところを正しく「独擅場」(七七頁)に作るやうな見識を持つ岡田氏が、「なかんづく」(八五・一七八頁)と記してゐるのは、いささか解せない印象だ。これは漢文「就中」の訓読「中に就く」が音便化した語なのだから、正しくは「なかんづく」である。昨今は大学生ですら大半が「なかんづく」といふ言葉そのものを知らないといふ情けない状況だ。しかし、いや、だからこそ、正しく「なかんづく」と記してほしいと願はずにはゐられない。むろん、かうした仮名遣ひの問題は、独り岡田氏のみに限つた話ではなく、広く日本語全体に関する重要事だ。

一方、希望とは、変奏といふ概念についてである。以前から私は音楽における変奏がいかなる概念なのか、曖昧模糊としたままだ。変奏には装飾変奏と性格変奏があり、ベートーヴェンを例とすれば、前者の代表は《六つの変奏曲》作品三四、後者の典型は《ディアベリ変奏曲》作品一二〇かといふ程度のあやふやな知識にとどまつてゐる。けれども、変奏といふ概念を、変奏曲のみならず、他の楽曲にまで当てはめれば、たとへばソナタ形式における展開部は主題の変奏部であらうし、また再現部で第二主題が調性を変へて再現されるのも変奏の一たるを失ふまい。いつたい変奏といふ概念は、どこまで適用されるのか。変奏には狭義と広義があるといふ話なのか。狭くは変奏曲を指し、広くは変奏技法を指すと理解しておけば宜しいのか。ぜひ岡田氏には、次なる機会に、その該博な学識を以て「変奏(曲)の歴史」を整理していただけると有り難い。

右は、岡田氏の見識と学識を全面的に信頼したうへでの注文と希望だ。私は岡田氏の種々の著作によつて日本人の西洋音楽に対する理解・認識が飛躍的に向上することを信じて疑はぬ者である。